

ことばは

楽しい 4

世界にはいろいろなことばがあり
それを使って生活している人たちがいます
数多くの魅力あふれることばを育んだ
風土や文化を紹介しながら
ことばを学ぶ楽しさを伝えていきます

フィリピン語

国立民族学博物館 地域研究企画交流センター 赤嶺淳

haloq-haloq (ハロハロ)

ゴチャ混ぜ



赤嶺 淳...あかみね・じゆん
1967年大分県生まれ。
フィリピン学Ph.D(フィリピン
大学)、フィリピンと
インドネシアを中心とする
海洋民のことばと文化を研究。
掲載の写真はすべて
筆者の撮影によるもの

サンボアンガの乾物市場。
干魚は農村部の
貴重なタンパク源だ



フィリピンでは、ハロハロを食べてほしい。果物や豆類のシロップ漬け、ナタ・デ・ココ、寒天、アイスクリーム、カスタード・プリンが載ったかき氷の豪華版だ。隠し味の練乳もにくい。ハロは「混ぜる」という動詞、ハロハロで「ゴチャ混ぜ」状態を意味する。

フィリピン社会の特徴は、この「ゴチャ混ぜ」に集約されよう。たとえば、フィリピンには7,000の島があり、百の民族が百のことばをしゃべっている。フィリピンは16世紀半ばから約300年間スペインの植民地だったことから、現在でも人口のおよそ8割強がカトリックである。しかし、人口の1割しか占めないとはいえ、フィリピン南部にはイスラーム教徒が生活しているし、土着の精霊崇拜を保持する山岳民族もいる。フィリピン語はそんな多民族・多言語社会

をつなぐことばである。

外来文化の影響を借用語にみてみよう。たとえば、勘定の計算。在来のフィリピン語の数詞ではなく、スペイン語の数詞が用いられる。フィリピンへ通い始めたころ、「マッカハいくらですか」とフィリピン語で尋ねることはできても、「キンセ・ペソス(15ペソ)」とスペイン語が返ってくるお手上げだった。

「15」には想い出がある。地方で輪タクに乗ったときのことである。値段は交渉次第。開口一番、運転手は相場の3

倍をふっかけてきたが、半額の15ペソまで値切ったつもりだった。ところが、支払う際になると「50ペソで契約したはずだ」と譲らない。フィリピン語には長母音と短母音の区別がないし、語尾の子音は弱く発音されるため「フィフティーン」と「フィフティ」の区別がつきにくいからである。わたしたちがRとLを区別できないのに似ている。しかし、スペイン語系の単語をわたしが使えれば、このような失敗は起こりえなかった。15と50がそれぞれキンセ、シンクウェンタだからである。運転手としては、提示した価格の倍にも近い額を客が申し出たのだから、びっくりしたにちがいない。

さて、フィリピンには究極の「ハロハロ語」とも表現すべきことばも存在している。南部のサンボアンガ地方では、チャバカノ語というスペイン語とフィリピン固有のことばの混成語が話されている。フィリピン諸語に共通する文法にスペイン語の単語が埋め込まれているため、わたしにはスペイン語のように聞こえてしまう。スペイン到来の100年以上前から、南部には海洋民系のイスラーム王国が成立していた。したがってスペインの植民者たちは、まず南部のイスラーム諸族を平定しなければならなかった。その最前線がサンボアンガだった。香木や香料、籐などの森林産物と真珠や貝、^{ベッコウ}鼈甲などの海産物の集散地だったサンボアンガに、1635年スペインは砦を築き、イスラーム勢力と対峙した。チャバカノ語の誕生には、そんな緊張した歴史が関与している。

サンボアンガは現在も活気にあふれた港町だ。隣のマレーシアとの間に客船が往来するし、漁獲の水揚げは国内一、二を争う港でもある。港は、宗教も職業も異なるさまざまな人々が集うハロハロな空間だ。雑多な要素を排除しないこと。それがハロハロでもある。

(左)フィリピンの
ゴールデン・モスク。中華街に
隣接したキアボにある。
(中央)フィリピン民衆の足、
ジープニー。後ろはマニラの
中華街。華人もまた
ハロハロに華を添えている。
(右)バナウェの
ライステラス(棚田)
海拔1300メートルの山腹



フィリピン語はここがおもしろい!

フィリピン語は憲法で規定された「国語」であるが、首都マニラを中心に分布するタガログ語と大差ない。タガログ語の母語話者は、総人口6,600万人の25%にすぎないが、現在は約9割の人々が「国語」を理解すると考えられている。しかし、教育現場では依然として英語の影響が強いのが現実だ。その理由はフィリピン語で書かれた教科書が不足していることにもよる。また、母語以外の言語を学習しなければならない非タガログ人の心理的な抵抗感もある。そのような負担を軽減するためにタガログ語ではなく、「フィリピン語」という名称が採択された経緯を忘れてはならない。さて、日本はどうだろう。日本国憲法は「国語は日本語」などと記載してはいない。しかし、「国語」という科目のもとにわたしたちは「日本語」を学習している。無意識に「国語辞典」を引きもする。逆にいえば、フィリピンの言語事情は憲法に国語を明記しなければならないほどに複雑なのだ。

フィリピン語の世界をのぞく!

「それでもあなただけ」という歌がある。1992年頃に爆発的にヒットした歌だが、実は徳永英明の「最後のいいわけ」である。フィリピンでは1990年代半ばから日本のポップスが流行するようになった。その先鞭をつけたのがこの曲だ。最近では、サザンオールスターズの「ヤヤ」と「いとしのエリー」、長渕剛の「乾杯」などが人気を博している。フィリピン版の「乾杯」は、失恋した男性が再縁を嘆願する語りである。「一緒にいたい」というタイトルで、歌詞もたんなる翻訳ではない。さびの部分「乾杯 / いま君は人生の / 大きな大きな舞台にたち / はるか長い道のりを歩き始めた / 君に / 幸せあれ[※]をみてみよう。」「アウイト・コぼく(の歌を) / アイ・パキンガン(聴いてくれ) / アット・ラギン・タタンダアン(いつも思い出してくれ) / マハル・キタ(愛してるよ) / パグイピッグ・コ(ぼくが愛しているのは) / アイ・タギン・サヨ・シンタ(君だけなんだ)」。あふれんばかりの情熱。この「熱さ」もまたフィリピンらしさのあらわれだ。

注：
JASRAC 出9901040-901

海藻は加工されて
歯磨き粉、シャンプーなどに
利用される。スル諸島の海上村

筆者のおすすめ

- 『初めて学ぶフィリピン語』吉村近男著、語研、1994。
フィリピンはフィリピン語の英語名。
フィリピン語が系統だって学べる学習書。
テープも別売りされている。
- 『バナナと日本人』鶴見良行著、岩波新書、1982。
日比関係の在り方を問うた古典。
- 『ヤシの実のアジア学』鶴見良行・宮内泰介編、
コモンズ、1996。東南アジアの生活と日本の生活をつなげて考えるための入門書。
- 『漂海民：月とナマコと珊瑚礁』門田修著、
河出書房新社、1986。海に生きる人々の静かな
生活を描く民族誌。
- 『フィリピン家庭料理入門』原田瑠美著、農文協、
1994。すぐにでもできる異文化体験。

フィリピン語語関連の講座および資料の
閲覧・入手について
アジア文化会館(語学講座)
東京都文京区本駒込2-12-13
tel 03-3946-4121
国際交流基金アジアセンター・ライブラリー
(資料閲覧)
東京都港区2-17-22赤坂ツインタワー1階
tel 03-5562-3895

ピナツボ復興むさしのネット(語学講座、関連講座、
資料閲覧、スタディツアー -)
東京都三鷹市野崎3-22-16
tel 0422-34-5498
フィリピン情報センター・ナゴヤ(資料閲覧、スタディ
ツアー -)
愛知県名古屋市昭和区宮東町260
名古屋学生青年センター内
tel 052-781-0165
アジア図書館(資料閲覧、語学講座、関連講座、
スタディツアー -)
大阪市淀川区東中島5-18-20
tel 06-6321-1839
北九州国際交流協会(談話室)
福岡県北九州市八幡区平野1-1-1
国際村交流センター3階
tel 093-662-0055
Kumusta(雑誌)
KUMUSTA Online(ホームページ)
http://www.kumusta.com/
問い合わせ先:クムスタ・コミュニケーションズ
tel 03-3380-4260
アジア文庫(書籍、ミュージックテープ販売)
東京都千代田区神田神保町1-15内山ビル5F
tel 03-3259-7530

